

■ 稚内港末広地区クルーズ船等 対応施設供用式典について

北海道開発局 稚内開発建設部

はじめに

日本最北の重要港湾である稚内港は、道北の流通拠点として、また、沿岸・沖合漁業の基地、さらには利尻島、礼文島及びロシア連邦サハリン州とを結ぶ交通結節点として重要な役割を担っています。近年は、サハリンプロジェクトの関連資材や船舶の中継港、さらに外国からの風力発電資材や生鮮魚介類の輸入港として利用されるなど、益々その役割の重要性が増しているところです。

事業概要

稚内港末広埠頭には水深 12m の岸壁がありますが、岸壁の延長が 240m しかないため、3 万トンを超える大型クルーズ船は接岸することができず、大型クルーズ船の寄港要請に対しては、これの受け入れができない状況となっていました。

また、稚内港にはサハリンプロジェクト関連の調査船・作業船が乗組員の交代や物資補給などのために多く寄港していますが、大型船の複数の接岸が困難な状況でした。

以上のような問題を抱えていた稚内港でしたが、地

元住民等の強い要望が実り、平成 28 年度から、最大 12 万トン級の大型クルーズ船の受入や、係留時の安全性や効率性の向上を目的とする整備に着工しました。整備は末広埠頭の既存岸壁を有効に活用する方針の下で行い、既存岸壁の沖側にクルーズ船等の係留ロープをとるための係船柱(ビット)2 基及び橋台を整備しました。また、既存岸壁上には、係船柱の新設や、舗装コンクリート打ち替えが完了しており、平成 30 年度中には、既存岸壁と各係船柱間を渡るための 3 基の連絡橋が完成します。

本施設の整備により、大型クルーズ船の接岸が可能となるのみならず、サハリンプロジェクト関連の調査船や作業船の複数の係留が可能となり、稚内港の利用機会の拡大が期待されます。

供用式典

平成 30 年 7 月 27 日(金)に、初めて本施設を利用するクルーズ船「飛鳥Ⅱ」の寄港に合わせ、稚内市および北海道開発局稚内開発建設部が主催者となり、供用式典を開催しました。式典には約 40 名が出席し、稚内市の工藤市長と、稚内開発建設部の和田部長が式辞を



係船柱(ビット)整備状況 (H30.7.3)

述べ、国土交通省北海道局成瀬港政課長の代読により、北海道局長の挨拶が行われました。これを受けて、来賓である武部衆議院議員からご祝辞をいただきました。

その後、富澤稚内港湾事務所長から「事業概要」の報告があり、最後に来賓や関係者によるテープカットが執り行われました。

おわりに

本施設は道北地域で初めて12万トン級の大型クルーズ船の入港が可能となり、日本の最北端に新たなクルーズ周遊ルートの拠点が生まれることが期待されています。稚内開発建設部としましては、周辺環境の保全と工事の安全に万全を期し、残りの連絡橋2基の早期完成を目指し、鋭意事業を進めて参ります。



供用式典におけるテープカット

